

## 全体講評

今年も、モデル化と統計テーマのバランスが良く、作品の質はより高くなり多様なテーマの応募がありました。新規参加校も多く参加校数も大幅に増加していました。世の中の AI ブームや政府のデータサイエンス振興策が浸透しつつあり、本コンテストの意義がより広く理解されてきているものと思われます。

対象としては、非常に多様なテーマがありました。日常的なテーマとしては、エスカレーター両側立ちの問題や電車内・改札・バス停などの混雑の問題など、公共交通に関連したテーマが多くみられ、また学校内の物品の移動やゴミ受けの排水の効率化などモノの移動の効率化をテーマにしたものも多くみられました。また、物理的なテーマとして、花卉やピンポン玉の運動、渦の形状などがありました。方法論としても多様な手法が用いられていて、シミュレーション、テキストマイニング、視線追跡装置等、最新の高度な手法を活用した作品と共に、地道に統計をとり興味深い結果を導いた作品も見られました。

これらの作品に共通するのは、どの作品のテーマも、日常的に感じた率直な疑問が出発点になり興味深い研究として展開されているということであり、研究のあり方として大変望ましいものと思います。面白い研究に結びつくような疑問に遭遇するためには、常に身の回りのことに対して、What, How, Why の疑問の意識をもって接していることが極めて重要だと思われます。また、物事をブラックボックス化しないことも重要です。物事の中身や仕組みを常に考えていくことで、問題解決への道筋が見えてくることも多いです。このような意識を持ちつつ、是非、学んだ知識を実社会の幅広い対象に活かすことで、本物の知識・技術へと育てていってほしいと思います。